

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520499

研究課題名(和文)近現代の漢語動詞の演变分化による機能構文の構造発展と機能義変容に関する通時的研究

研究課題名(英文)A diachronical study on the development of sentence structures caused by some functional changes of verbs in Modern Chinese

研究代表者

藤田 益子(Fujita, Itsuko)

新潟大学・企画戦略本部・准教授

研究者番号：10284621

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：動詞には虚化し実質的動作行為の意味が希薄になり文法的な機能を帯びるものがある。これにより介詞という新たな品詞が生じる。特殊な動詞が兼語式により使役や受動の機能構文を構成する。補語としての文成分の役割を担う。動作量を表す補語の概念から重畳形式に発展する等の現象が発生する。これらは相乗的に作用しa.形態変化の乏しい漢語の文構造に変化を与え構文を複雑化する、b.使役受動の両機能のヴォイスを有する構文が出現する、c.補語の発達により動補構造の重心が逆転し機能義が変化する等、漢語の近現代化に影響を与えた。漢語の形態、構文、機能の変遷を解明すべく動詞の演变という観点から通時的・共時的研究を行った。

研究成果の概要(英文)：Some modern Chinese verbs lose their original meanings and feature grammatical functions. This verb grammaticalization often brings the following results. 1) Prepositions emerge. 2) Causative and Passive structures are produced. 3) Some become complements giving specific meanings to main verbs. 4) Verb-origin complements showing the amount of some movement sometimes form reduplicative compound structures. These often affect one another and then; a) some combined verb structures occurred, b) particular sentence structures with both causative and passive functions appeared, and c) the meanings of some complements became more important than that of main verbs within sentences. This has greatly influenced the modernization of Chinese and enables us to create sentences with more complicated contents. To find out how forms, structures and functions change in Chinese, I did research on modern Chinese verbs both diachronically and synchronically and focused on the verb grammaticalization.

研究分野：言語学

キーワード：漢語 近現代 動詞 機能 構文

## 1. 研究開始当初の背景

従来の研究では、北京語を基軸に近代から現代への中国語の語彙の変遷を辿り、現代北京語、近代北京語、方言、社会と文化背景の四方向から言語の変化と要因との関係を考察し、現代中国語の礎となった近代漢語の語彙変遷について研究を進めてきた。その課程で、北京語の深部には来源の異なるいくつかの系統性を持った言語の脈流が存在し、時に平衡し時に交錯しながら現代に至る様相が見えてきた。現代の中国の公用語は、普通話という規定に則り人為的に整備された言葉であるが、その原形とも言うべき清代の北京語は単純な一方言ではなく、北京に存在する様々な要素が複雑に絡み合いながら、柔軟性を具えた巨大な集合体を形成していたことも明らかになった。その中でもこれまでの研究では、現代漢語の礎である清末の北京語における機能構文について個別に検証を進めてきたが、近代漢語の動詞の演变については、遅くとも唐代の口語資料にまで遡る必要があり、更に動詞全体の変化の潮流を把握しつつ、漢語の形態、構文、機能の変化に関わる変遷について、総括的に解明したいと考えるに至った。

## 2. 研究の目的

近現代の漢語動詞の演变分化による機能構文の構造発展と機能義変容に関する通時的な研究を行う。動詞には虚化し実質的動作行為の意味が希薄になり文法的な機能を帯びるものがある。これにより介詞という新たな品詞が生じる、特殊な動詞が兼語式による使役や受動の機能構文を構成する、補語としての文成分の役割を担う、動作量を表す補語の概念から重畳形式に発展する等の現象が発生する。これらは相乗的に作用し a. 形態変化の乏しい漢語の文構造に変化を与え構文を複雑化する、b. 使役受動の両機能のヴォイスを有する構文が出現する、c. 補語の

発達により動補構造の重心が逆転し機能義が変化する等、漢語の近現代化に影響を与える。これら漢語の形態、構文、機能の変遷を解明すべく動詞の演变という観点から通時的・共時的研究を行うものである。

## 3. 研究の方法

近代から現代にかけて漢語の機能構文が変貌する要因には、動詞そのものに関わる変化と、他の文成分に関わる変化の二種類が考えられる。また機能義に変化をもたらすものとして、機能語の前後に置かれる名詞の役割も大きな影響を与えている。そこで動詞から発展した機能構文と、近代から現代にかけて文構造を複雑化する要因となった動詞の虚化に関わる問題の双方向から、漢語の動詞の演变と構文、機能変化について研究を進めた。研究の要点となる動詞の変化と構文を複雑化させる要因となった文法上の現象を次にまとめる。

変化

一. 文成分の働きに関わる変化

二. 文の構造に関わる変化

分岐点

1. 品詞の転換

2. 述語動詞の後置成分への重心の移行

3. 賓語を前置する機能形成

4. ヴォイス(態)の機能形成

文法現象

. 虚化による介詞への進展

. 補語成分の発展

. 重畳形式の発展

. 処置、致使を表す機能構文の発展

. 兼語式の構成

研究構想内容と研究対象

(ア) 介詞への推移と特殊構文を構成する機能の展開

介詞に機能分岐する動詞グループを整理

した後、特に研究期間の後半に位置づけた第三段階の処置、致使を表す機能構文や、第四段階のヴォイス(態)を表す機能構文(使役、受動)に関わると考えられる虚化の現象に焦点を絞り分析を進めた。

(イ)動補構造の焦点の移行現象と機能構文に与える影響

補語の表現するものとしては、結果、動態、趨向、可能、場所、程度、様態、決定等が考えられるが、中でも補語が発展成熟期に入る清代頃から補語が文意の帰着点となる現象に着目し、文中の述語と補語成分の関係に着目した。

(ウ)短時態の発展経緯と漢語表現の多様化

動作量を表す補語から進展し、重畳形式が短時態を表すようになった。近代漢語の段階で発展し、形態と共に語彙表現が更に豊富になった形式と意味変化の推移を整理した。

(エ)処置式の機能義の変貌と主語成分の施受の関係

介詞化に伴う“把、將、以、為、用、捉、拿、著”等の変遷を唐代から現代までの白話資料を中心に用例を集積し、構文と機能義の両面から分析した。更に処置義から致使義が展開される要因と構文の特徴を解析した。

(オ)使役構文における語彙の盛衰と機能義の関係

“叫(教、交)使、讓、令、遣、放、著”等使役構文を形成する語を中心として、近世に多く複合化した“令使、令教、使令、教令、教著、遣令、遣放、放教、著令、著仰、著落”等との相関関係も含め盛衰を検証した。

(カ)受動構文における語彙の盛衰と機能義の関係

“被、蒙、給、與、見、叫”の相関関係も含めて盛衰を検証した。また“教、給”の如く使役と受動の両機能義が成立する語に対しては、主動と受動に形態の区別がない「施受同辞」と漢語語法の意合性の問題についても考察した。

#### 4. 研究成果

[平成 23 年度]

第一段階：「虚化による介詞への進展」

手順と方法：介詞への推移と特殊構文を構成する機能の展開を調査整理した。介詞へ移行する動詞の性質には所在、起点、方向、関連、到達、距離、経由、原因、目的、代替、用具、処置、依拠、除外、共同、比較、包括強調、処置等が挙げられるが、介詞全体の問題は範囲が広く、相対的な概略として馬貝加著『近代漢語介詞』等の先行研究が存在することから、介詞全体の変遷傾向を整理した後、特に第三段階の処置、致使を表す機能構文や、第四段階のヴォイスを表す機能構文に関わる虚化に焦点を絞り、通時的変遷を調査した。

[平成 24 年度]

第二段階「補語成分の発展と重畳形式の多様化」

手順と方法：補語は上古漢語ではあまり発達しておらず、文構造の変化は唐代以降、補語の発展に伴う構造の複雑化によるところが大きい。補語の発展はどのような意味を持つ動詞のグループが先行して発展したのか、更に現代に近づくにつれ二音節化が進むだけでなく、述語動詞よりも補語の方に重心が傾く傾向が見られるのは何故か等の問題に焦点を当て考察した。これは第三段階の処置義と致使義において現代に近づくにつれて致使義の勢力が拡大していく過程と関係する問題である。重畳形式は機能構文の構造を複雑化する一つの要因であり、重畳形式についても補語の発展形式の一部として考察を展開した。

調査対象

a.使成複合動詞、b.結果複合動詞等、初期の連動形式の用例から収集し、動補構造の焦点の移行現象と機能構文への影響を調査した。更に、重畳形式の短時態への発展経緯と表現の多様化を整理した。

[平成25年度]

第三段階：「処置、致使を表す機能構文の発展」

手順と方法：処置式の意味機能変貌と主語の施受の関係を明らかにした。“把”構文は、例外的な動詞の無い用例を除けば、基本的にS+“把”+N+V<sub>p</sub>(V、VC、VN、V得C)の何れかの構造により成り立つ。また、Sは動作主として人物の場合もあるし、前文において説明されたその場面の状況などが相当する場合もあり、省略されることも少なくない。つまり、“把”構文における必要最低限の構成要素は、“把”と「N(=“把”の後ろの賓語)」と「V<sub>p</sub>(=動詞+補語・名詞・“了”等)」であり、このNとV<sub>p</sub>の関係によって、“把”構文の表す機能義に違いが生じている。“把”構文はもともと処置義を中心発展してきたが、近代以降、致使義の構文に急速な増加傾向が見られる。動作の結果の生じるプロセスに注目して機能義を捉えると、この二つの相違の分岐点は「対象に何かをすることで、事が運ばれ、ある状態や結果を得る」、或いは「因果関係があってその成り行きの延線上で何かが起こり、ある状態や結果が引き起こされる」という問題にあると考えられる。以下、前者を処置義：「対象にある動作行為をすることで得られた結果を表す」、後者を致使義：「因果関係（関係が幾分希薄なものも含まれる）によってある動作行為が生じた状態、結果を表す」と定義づけ、この二つの観点から“把”構文の意義と移行の原因を分析した。

[平成26年度]第四段階：「ヴォイス(態)を表す機能構文(使役、受動)に関わる機能形成」

手順と方法：使役・受動構文を形成する語彙の盛衰と機能義の関係を明らかにし、文法的な機能を帯びる過程で、変遷の歴史上どのようなプロセスを経たかを考察した。“被”構文の構造を「意味上の受動者(S)+“被”+意味上の動作主である(N<sub>p</sub>)+動詞(V)+その他の

成分」とした場合、動作主(N<sub>p</sub>)の有無によって大きく構造が二つに分類されるが、この点を含めた構造のターニングポイントに関しては、唐代の『敦煌変文』辺りと見られ、大きくは次のような変化が見られる。動作主(N<sub>p</sub>)を用いることが普遍的になる。動詞の後ろに別の賓語をとるようになる。動詞に様々な形式の補語が付帯するようになる。状語が多様化する。受動義を持つ“被”の多様な構文は、この頃に最も複雑に発展し、現代漢語まで続く粗方の基本的構造は成立しつつあったと考えられる。そこでこの四点を中心に分析を進めた。また、構文内部の構造として元明清期の介詞の確認すべきポイントとして、「a.文成分の役割分担の細分化と明確化。b.介詞のある文の構文の序列の複雑化。」等を考慮にいれ、機能構文(使役、受動)の構造変化を整理した。

第五段階：総括的研究として、動詞の機能構文と「施受同辞」の関係、漢語語法の意合性を考察した。

方法と手順：総括的研究を行う過程で、給予動詞が三つの機能を兼ねる理由について言及した。

手順と方法

使役文・受動文と、主語の施事・受事の関係

処置文と使役・受動文の構造、処置文と連動式、使役文と受動の各関係について整理しまとめた。

更に、給予動詞は使役、受動、処置を兼ね、二つの名詞性成分と述語動詞は施受関係にあり、施受関係は変換が可能となる問題を考察した。漢語が施受同辞である本質的な特徴に帰結するものであると考えられる。

最終的に、様々な語彙の変遷を調査した過程において、このような外的な要因を受けにくく、長い歴史の中で幾つかの支流を作りながら文法構造に大きな影響を与え続ける動

詞の演变とその文法的機能を帯びた構文の変遷が、漢語史における近現代化の特徴として相乗的作用し、現代漢語の文法機能において特に“把”構文や受動・使役の機能を持つ機能構文として発展したことで、ヴォイスに関わる問題として極めて重要な役割を果たしていることを確認した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

1. 藤田益子、日本語と中国語における授受表現の相対的内包と外延の俯瞰的考察(和文)、『国際センター紀要』、「(査読無)」、第11号、2015年3月、1-40頁、新潟大学国際センター

2. 藤田益子、近代漢語における“把”構文の機能義—『児女英雄伝』からのアプローチ—(和文)、『国際センター紀要』、「(査読有)」、第10号、2014年3月、11-32頁、新潟大学国際センター

3. 藤田益子、近代及び現代漢語白話資料にみられる“價”の機能と特質(和文)、『国際センター紀要』、「(査読有)」、第8号、2012年3月、20-78頁、新潟大学国際センター

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

藤田 益子 (Fujita Itsuko)  
新潟大学・企画戦略本部・准教授  
研究者番号：10284621

##### (2)研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3)連携研究者

( )

研究者番号：